

## 鳥類学者、清棲幸保

清棲幸保（1901～1975年）は、鳥類学および写真撮影の先駆者であった。彼は塩原に別荘を所有し、20年以上にわたってそこを研究の拠点として使用していた。

清須は、野鳥の研究で多くの進歩を成し遂げ、渡り、繁殖パターン、摂食習慣などの生態学研究の第一人者であった。日本の高山鳥をまだ誰も研究していなかった時代に日本北部の山々で10年間研究し、そこで多くの種を発見した。清棲は、塩原がホシガラス、キクイタダキ、キバシリ、イヌワシなどの鳥の生息地であることを最初に特定した人物である。

日本鳥類大図鑑は、清棲の記念すべき全3巻の作品であった。この917ページの作品には、解剖学的解説、保存技術、地図、図表および何百枚もの鳥、雛、巣、羽、卵に関する写真やイラストが含まれている。1945年、作品は、出版が予定されていた日の少し前に、第二次世界大戦の東京空襲でほぼ完全に破壊されてしまった。清棲は、その後、塩原で原稿全体を書き直し、プロジェクトの作業が開始されてから満14年後の1952年ようやく出版された。

清棲は、封建時代の有名な大名家である真田家に生まれ、彼の父親は、現在の長野市にあった松代藩最後の領主であった。大学時代、幸保は日本の皇族のひとつである清棲家の養子となった。彼は東京帝国大学（現在の東京大学）で科学を学び、京都帝国大学（現在の京都大学）では、大学院時代、鳥の生理学的研究を行った。彼は、1954年から1964年まで宇都宮大学の講師、助教授、教授であった。